

平山 亮『介護する息子たち』刊行記念フェア 「オトコとケアの見方・変え方」ブックリスト

「男性の生きづらさ」への注目がアカデミアに限らず共有されつつある一方で、成人した男性の息子としての経験は、これまでほとんど語られずにいる。あるいは、こうも言えるかもしれない。息子であることは、「男性であること」には含まれていないのだ、と。(略)息子としての自分に向き合わざるを得ない経験としての親の介護。本書は、息子としての男性とはどのような存在であるかを、親を介護する男性(息子介護者)の経験を通して考察したものである。

——「序章」より抜粋

介護する息子たち

男性性の死角とケアのジェンダー分析

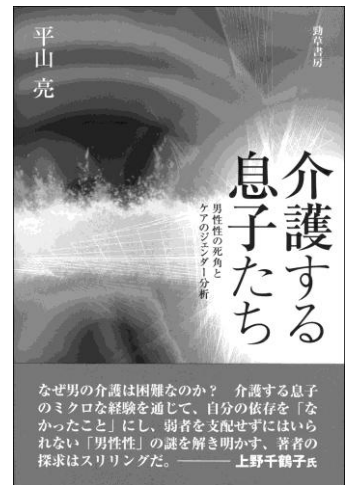
平山 亮

なぜ男の介護は困難なのか？ 介護する息子のミクロな経験を通じて、自分の依存を「なかったこと」にし、弱者を支配せずにはいられない「男性性」の謎を解き明かす、著者の探求はスリリングだ。

——上野千鶴子氏

●定価：本体2,500円＋税 2017年2月刊行

四六判上製280頁 ISBN978-4-326-65405-5 C3036 (勁草書房)



男性学入門 (作品社)

伊藤公雄

日本の男性学はここから始まった——フェミニズムを受けて立った著者が、男ならではの困難と課題を、ユーモアを織り交ぜながら優しく明快に語ってくれます。

家父長制と資本制 マルクス主義フェミニズムの地平 (岩波現代文庫)

上野千鶴子

「不払い労働」をキーワードに、男たちが当たり前のように履かせてもらっている下駄を、痛烈に描き出します。90年代当時の著者の将来予測が、現在あまりにも当たっていることにも驚かされるでしょう。

生活保障のガバナンス ジェンダーとお金の流れで読み解く (有斐閣)

大沢真理

国際比較データをもとに、日本の税・社会保障の現状をジェンダー視点で分析します。そこから明らかになるのは、この国では共稼ぎ世帯が苦しくなるようにお金が流れている、という衝撃の事実……

「家族する」男性たち おとなの発達とジェンダー規範からの脱却 (東京大学出版会)

大野祥子

父親たちへの調査から、性別分業構造を変える道筋を探ります。制度が変わるのを待つだけでいいの？ 男たち一人ひとりができることもあるはずでは？ という本書のメッセージは、いくら強調しても足りません。

フェミニズムの政治学 ケアの倫理をグローバル社会へ (みすず書房)

岡野八代

女たちが行ってきたケアという営みをもとに、弱者を中心にした政治のあり方を考えます。社会的包摂の概念を180度転換する、目からウロコの議論に圧倒されるでしょう。

21世紀家族へ 家族の戦後体制の見かた・超えかた (有斐閣)

落合恵美子

人口構造の変動に注目しながら、戦後の家族のあり方がなぜ・どのように私たちの「標準」になっていったのかをわかりやすく語ります。英訳され、海外でも広く読まれている日本の家族社会学の必読書。

介護問題の社会学 (岩波書店)

春日キスコ

社会学の視点から、高齢者介護を見つめ直して見るための必読の一冊。現場に駆けつけ、支援者とともに問題に取り組んできた著者だからこそ鋭い観察と指摘にうならされることでしょう。

概念としての家族 家族社会学のニッチと構築主義 (新泉社)

木戸 功

私たちはどのような家族像を前提に、どのように現実を組み立てているのか。本書が詳説する構築主義の家族社会学は、家族の定義をあこれ聞いてもどこかしっくりこないあなたにこそオススメです。

実践の中のジェンダー 法システムの社会学的記述 (新曜社)

小宮友根

性が社会的につくられるとはどういうことか。性差の起源を説く進化心理学は何を見落としているのか。法解釈のなかでは女と男の何が当たり前になっているのか。緻密で真摯な分析の連続に酔いしれてください。

平成オトコ塾 悩める男子のための全6章 (筑摩書房)

澁谷知美

腕力と性欲で繋がり合うことが「ふつう」になり過ぎた日常を、男子はどうやって変えられるのか。そのためのエッセンスが詰まっています。若者向けに書かれているものの、この本を読むべきはむしろオジサンかも。

働く女性とマタニティ・ハラスメント 「労働する身体」と「産む身体」を生きる (大月書店)

杉浦浩美

マタニティハラスメントの概念を打ち出した記念碑的著作。身体とは本来的にままならないものであることを前提に、その身体をケアする権利が皆に保障された就労システムの必要性を、誠実な分析を通して訴えます。

息子介護 40息子のぐうたら介護録 (全国コミュニティライフサポートセンター)

鈴木宏康

同居の親をひとりで介護する日々を綴った息子の手記。淡々とした筆致ながら、介護する家族を八方ふさがりに追い込む制度の矛盾を、こんなにも簡明かつ的確に突いた本は他にありません。

男性のジェンダー形成 〈男らしさ〉の揺らぎのなかで (東洋館出版社)

多賀 太

男としての自己がつけられ、揺さぶられる過程が丹念に描かれます。その人にとっての「あるべき男像」をつくるのは抽象的な社会などではなく、顔の見える相手との日々のやりとりなのだということがよくわかります。

男性学の新展開 (青弓社)

田中俊之

日本では一人前の男のイメージはどのようにつくられているのか？ 男性学の理論を駆使しながら、日本社会のなかの男たちの序列と、それを通してできあがる「理想の男」像を解剖した力作です。

若者の介護意識 親子関係とジェンダー不均衡 (勁草書房)

中西泰子

これからの介護を担うことになる若い世代の親子観・介護観に迫った、貴重な成果と論考。親子関係に対する「ふつう」の見方に、どんなジェンダーバイアスがひそんでいるかを気づかせてくれます。

共依存 苦しいけれど、離れられない (朝日文庫)

信田さよ子

ケアが支配のツールになることを思い知らされる一冊。妻を甲斐甲斐しく世話する夫の抑圧性を描いた第3章には思わず背筋が凍ります。自立と依存の二項対立を斥ける熊谷晋一郎さんの解説も秀逸。

「居場所」のない男、「時間」のない女 (日本経済新聞出版社)

水無田氣流

多様な統計資料と社会科学の知見にもとづいて、日本の働き方の「ここがヘンだよ」を解きほぐします。「ふつう」に働くことが、女性と男性にもたらず窮屈と不健康。その背景に迫る一冊。

江戸時代の老いと看取り (山川出版社)

柳谷慶子

日本では介護はずっと嫁の務めだった？ 史料をひもとき、お侍さんの時代の高齢者ケアの実像に迫ります。あなたが日本の伝統だと思っていた家族の姿は、そこにはありません。

なぜ女性はケア労働をするのか 性別分業の再生産を超えて (勁草書房)

山根純佳

家庭でも職場でも、いつの間にか「ケア＝女の役割」になっているのはなぜ？ 女にとって割に合わないはずの選択を「合理的」に見せてしまう社会のからくりを、スッキリと解き明かしてくれます。

現代思想 2015年3月号 特集「認知症新時代」 (青土社)

老いをめぐる社会学に関心がある人には必読の論集。個人的ベストは、認知症の家族を介護することの不安に寄り添った木下衆さんの論文。クールで精緻な分析と著者の繊細な優しさが同居した傑作です。

迫りくる「息子介護」の時代 28人の現場から (光文社新書)

平山 亮

親を介護する息子たちの語りを通して、男たちが「ふつう」に築いてきた他者との関係が、介護の場面に何をもちたらずかを描きます。「男には弱さを認められない弱さがある」と説く、上野千鶴子さんの解説は男性必読。

メロスのように走らない。女の友情論 (ベストセラーズ)

北原みのり

女友だちとの経験を通して、ミソジニーによる分断を乗り越える道を模索する自己省察の軌跡。著者の率直で伸びやかな文章に触れるたび、翻って男が友情を語るときの語彙の貧しさを思い知らされます。

[選書&紹介文] **平山 亮**

* 掲載された書誌情報に誤りがございましたら、悪しからずご了承ください。

また、出版社の事情により品切れ・絶版の可能性のある本も含まれています。

* リストの中には店頭でご準備のない書籍もございます(出版社に在庫があるものはお取り寄せいたします)。